深い学びのために

学習のポイントの解答例

1 **「かれは何ぞ。」（五八・6）とあるが、この言葉から女がどのような身分であるか、考えてみよう。**

【答】 高貴な身分。

▼ポイント▲ 高貴な身分で、外に、まして闇夜に出ることなどないので、川辺の草の上に降りた露が何かも分からないのである。

2 **「白玉か」の歌には、男のどのような心情が込められているか、話し合ってみよう。**

【答】 大事にしていた女は消えてしまった、いっそ私も消えてしまったらよかったのに、という女に対する限りない恋心から、それを失ってしまった悲しみ、深い絶望感が、そこには感じられる。

▼ポイント▲ 「あの白く光るのは何。」と女に問いかけられたとき、男は追っ手から逃げるのに必死で答えるような余裕はなかった。しかし、女を失った今、そのようなやりとりですらもう望めなくなってしまったことを痛感し、女と一緒にいたあの瞬間に戻って、幸せな状態のときに、露が消えるのと同じように死んでしまえばこんな悲しみを味わうことはなかったのにと思う。「露」が、ここでは、一つのキーワードになっており、はかなさの象徴となっている。これは、結局手に入れることのできなかった女を表すと同時に、女と共に逃げた夢のような短い時間も表していると言える。なお、地の文ではあるが、「足ずりをして泣けども、かひなし。」の部分にも男の心情が示されており、参考になる。

3 **各段落の内容を簡潔に説明してみよう。**

【答】
・第一段落（初め～〈男に問ひける。〉）
ある男が、手に入れることができそうにない高貴な女を、やっとのことで盗み出し、芥川の辺りへ連れて行ったところ、女は露を見て、「あれは何か。」と尋ねた。
・第二段落（〈行く先多く、〉～〈消えなましものを〉）
夜が更け雷雨になったので、男は一夜明かすため女を蔵の中に入れ、自分は戸口で警護をしていた。その間、中にいた鬼が女を一口に食べてしまったが、男は雷の音で女の叫び声に気づかなかった。夜が明けて事態が分かった男は、たいそう嘆き悲しんだが、どうすることもできない思いを歌に詠んだ。
・第三段落（〈これは、〉～終わり）
これは後に二条后となる女が、従姉妹にあたる女御のそばに仕えるようにしていたところ、その美しさから、男が盗み出して連れ出したのだが、后の兄たちが聞きつけて取り返した。それを鬼の仕業だと言ったのだった。后がまだ若く、入内前のこととか。

言葉と表現の解答例

1 **次の傍線部「なむ」を、それぞれ文法的に説明してみよう。**

(1)「かれは何ぞ。」となむ、男に問ひける。（五八・6）

(2) はや夜も明けなむと思ひつつ居たりけるに（五八・11～五九・1）

【答】 (1) 係助詞（強意）　(2) 終助詞（他に対する願望）

▼ポイント▲ (1)「なむ」が直前の語「かれは何ぞ。」を強調している。結びの語は「ける」。(2)識別については、「語句の研究」参照。

2 **本文中から、副詞の呼応を用いた表現を、二か所指摘してみよう。**

【答】 え得まじかりける（五八・2）、え聞かざりけり（五九・2～3）

▼ポイント▲ どちらも副詞「え」と打消の語の呼応で、それぞれ「…できそうにない」「…できない」と訳す。

言語活動の解答例

1 **第三段落（五九・8～13）があることによって、どのような効果があるか、話し合ってみよう。**

（意図）一話の物語として評価したとき、第三段落があるのとないのとでは、物語全体の印象がどのように変わり得るのか考え、整理することで、「伊勢物語」の鑑賞を豊かにする観点を共有し、今後の参考にできるようにする。

（手順）

1　物語の展開を踏まえ、悲恋に終わった原因について考える。

二人の恋の成就を阻んだものが異なることを確かめる。鬼であれば、人知の及ばぬところからの不条理な横槍であるが、兄たちであるとすれば、権勢を握る藤原氏の政治的な目論見ということになる。

2　第三段落があることによって明確になったことを明らかにする。

鬼の仕業にしてしまうよりも物語の真実味が増すという効果を指摘する声も多く聞かれようが、むしろ平安京の怪異譚としてあった方がよいという向きもあるかもしれない。女が後の二条后であったとなると、主人公に擬せられる業平の出自から、藤原氏の専横とそれに抗う存在としての男という構図も見えてきて、恋する二人がロミオとジュリエットのようにも映るだろう。もちろん第三段落ありの姿こそが物語の真の姿であるかのような誤解を与

えることなく、多様な意見を求めたい。

（ゴール）現存「伊勢物語」が、業平の歌語りから様々な曲折を経て成立していることを理解するためのきっかけとなるような意見交換の場となれば成功であろう。現実の業平と高子には十七才もの年齢差があるわけであるが、たとえばそうしたことをはじめとした背景事情への関心がより高められたり、あるいは「白玉か」の歌に戻って、歌の詠まれた事情や解釈についてあらためて考えてみたくなるようなまとめ方ができるよう工夫したい。

（上野　正史）